

誰もが抱える悩みを。パッと解決！

福田貴一先生の 「福」が来るアドバイス



早稲田アカデミー
千葉ブロック統括責任者
福田 貴一

子どもたちの理解度＝テストの成績ではありません！

成績はアップダウンするものです！

毎週の単元テストや実力テストの成績で、良いときと悪いときの差が大きいくらいです。テストの成績のムラは、誰もが経験することですが、特に小学校低学年から中学年の生徒に関してはその幅が大きく、気にされている保護者の皆様も多いのではないでしょうか。

成績がアップダウンする理由は、大きく分けて四つあります。

① 科目は、子どもはインテリジェントに内容を学ぶことはできません。様々な思考方法を学び、経験を通じて身につけていく必要があります。そのため、年齢が上がるにつれて、身につけた内容をうまく使えず、問題が解けるわけではないのです。よく「わかる」といって、同じ問題の話が繰り返されますが、両者の間の距離が大きく離れているのが子どもであり、成長するにつれて学習経験が増えてくるにつれてその距離が近くなることを「理解」だと感じます。

② テキストは考え方が難しいものの、理解してしまえば必ずできるもののように感じられるはずですが、「この解き方がわかっていれば、この問題は解けるはずだ」と考えるでしょう。そして、その問題が解けていない子どもを見て、「わかっているからできていないのだ」と考えすぎてしまいがちです。しかし、小学校3、4年生がテストで正解できていない原因のほとんどは、わかっていないからではなく、「解ききれないのだ」と感じているのです。

③ 成績が上下する原因の2つ目は、「そのテストを受けようとするときの環境」が考えられます。得意な教科で驚くほど悪い点を取ってしまったことがありますが、その理由を問いただすと、たとえば「国語などは、文章が頭に入らなかった」というような理由が返ってくる場合があります。その理由は、「隣の生徒の動きが気になる」「か」「なんだか眠たくて」と、テストの内容そのものとは関係ないケースが多くあります。そんな理由を聞くと、「テストに集中しなさい」と叱りたくもなりますが、それが子どもにとっての部分でもあるのです。精神的なトレーニングをコントロールして、

中学受験を考えている子どもたちは、月に1回程度、塾での学習内容が定着しているかどうかを確認するテストや実力テストを受けることとなります。しかし、これらのテスト結果は、本来の意味での子どもたちの理解度を表しているわけではないのです。そのことを理解したうえで、どうすれば子どもたちがテストで、さらには中学受験で実力が発揮できるようになるのか、このことを考えてみましょう。

100%の状態では本番に臨むというのは大人でも難しいことではありません。試験場の雰囲気や環境、そして、お子様の精神状態なども、テスト結果に大きく影響を与えることを理解しておきましょう。

④ 目の原因は「時間の感覚」です。たとえば、合不合判定テストのように、数多くの問題を出す中で問題処理能力や作業処理能力を測るテストの場合、作業処理スピードの速いタイプの子どもは比較的早いうちに高得点が取れるようになります。一方、超難問が解けても作業処理スピードの遅い子どもは、学年が進むにつれて作業処理スピードの差が広がるため、速い子どもに比べると偏差値が下がってしまっていることがあります。

⑤ 最後のひとつが「精神的成長」です。同学年、と一言で言っても、精神的な成長は一概ではなく、幼い子どもでもいけば、大人顔負けのまじめな子どももいます。当然ながら、精神的な成長が早いほど、国語の記述問題などでは有利になるでしょう。たしかに、中学受験そのものでは精神的に幼い子どもの方が不利になります。大きな意味で考えると、幼いタイプの子どもの方が中学受験には向いています。「精神的成長」は、15、16歳くらいで差がなくなると考えた場合、12歳ではまだ精神的に幼い子どもが、今後どのような環境で成長した方が良いのか、このように考えてみる

⑥ 中学受験をする意味も変わって来ているように思います。

復習を繰り返すことで定着を促進

四谷大塚主催の「Y.T教室」は、その週に学習した内容を週末にテストして、その日にテスト当日に解説授業で復習する。この流れで学習を進めています。つまり、子どもたちには、解けた問題、解けなかった問題にかかわらず、全問を当日のうちに理解させるのです。私たちが「学習→テスト→復習」の流れこそが、学習内容の定着につながると思っています。

⑦ 解けるようになるわけではなく、解説授業の後、なんとなく分かったような気になります。しかし、このことを何度も繰り返すうちに、「いつか」「あー」「頭のなかでひらめく瞬間が訪れるはず」です。そして、「あー」と列挙したそのときこそ、学習した内容が定着した瞬間でもあるのです。

定着させるために欠かせない

「頭の中のダンス」

⑧ 言いつてもありませんが、中学受験を成功させるためには、それまでにインテリジェントに知識を上手にアウトプットできる必要があります。そのため、5、6年生になれば、もちろんインテリジェント作業も行いますが、アウトプットトレーニングがメインになります。なお、このアウトプットトレーニングとは、頭の中にダンスがあり、その引き出しの中から必要な知識をすばやく取り出す練習を行うというものです。

⑨ 5、6年生で引き出しから知識を取り出すトレーニングを行うわけですから、それまでの間に「頭の中のダンス」を作っておかなければなりません。まず、1、2年生では、いろいろな知識をインテリジェントにするためのダンスをどんどん大きく、頑丈にしていきます。そして、3、4年生では「頭の中のダンス」の引き出しをしっかりと形作りしていきます。

⑩ この3、4年生で作る引き出しは、5、6年生でアウトプットする際により重要になってきます。と言いつても、1、2年生で作る「頭の中のダンス」の大きさや容量に個人差はさほどありません。しかし、3、4年生での努力が足らず、引き出しがひたひたでできなかつた場合、そこに遊びも勉強も何もかも詰め込むことになるので、5、6年生でアウトプットしようとしても、スムーズに必要な知識を取り出せなくなるのです。そうならないためには、算数や国語など、教科ごとの引き出しはもちろんのこと、算数であれば数量・図形・数表などのように、分野ごとにも整理したいものです。まさに洋服ダンスと同じです。

「頭の中のダンス」を作るための学習

⑪ 「頭の中のダンス」を作るための学習

⑫ 「頭の中のダンス」を作るための学習

⑬ 漢字練習は、1年生のときから新しい漢字を習いながらに行わせるものです。しかし、6年生になれば、仮に漢字練習をしていなくても習った漢字はいつの間にか読み書きできるものになっていくはず。それにもかかわらず、低学年の頃から漢字練習をさせるのは、何度も練習することで自分なりの暗記方法を見つけていくのです。この「自分なりの暗記方法を見つけていく」と、「頭の中のダンス」の引き出し、仕切りだと考えれば、3、4年生です。入念に仕切りだけを固めます。

⑭ 「頭の中のダンス」の引き出しや仕切り作りですが、成績がアップダウンする一つの原因(アウトプットするときに邪魔になる壁)を取り除くための学習です。残りの「環境」「時間の感覚」「精神的成長」は子どもならではの特性や特徴ですが、「頭の中のダンス」に引き出しをたくさん作ることは、いつでも、誰でもすることができます。成績を少しでも安定させるためにも、そして、中学受験を成功させるためにも、アウトプットがスムーズにできる「頭の中のダンス」作りを、まずは促してみま



ブログ 四つ葉café 公開中！



早稲田アカデミーホームページ・四つ葉caféにて公開

中学受験に関するブログを公開しております。このブログでは、学習計画の立て方、やる気の引き出し方、テストの成績の見方、学校情報など、中学入試に関する様々な情報をお伝えします。また、お子様と一緒にチャレンジする写真サイズも公開しておりますので、ぜひ親子で楽しんでみてください。

詳細はホームページをご確認ください。早稲田アカデミー